

日本語を楽しく

【第20回】あなたのNAMEは何ですか？

作家 阿刀田 高



だれしもが名前を持っている。たいていは一つ。だが二つ、三つ、
複数を持っている人もいる。が、それはともかく、

「お名前を教えてください」

「えっ。知らないの、田中ですよ」

多少なりともゆかりのある人の、その名前を知らないとなると、こ
れは失礼千万、相手は不快を覚えるかもしれない。

「いえ、いえ、いやだなあ。田中さんは知ってますよ。苗字じゃなく……

下のほう」



「ああ、静男ですよ。静かな男」

「あ、はい」

と頷く。関わりの深さにもよるが、これは知
らなくても許してもらえらるだろう。

名前には苗字と、それから「下のほう」とがあ
る。この「下のほう」をなんと言えばよいのか。

「姓名って言うだろ。苗字が姓、「下のほう」は
名だ」

「しかし「上のほう」だって名じゃないか」

「うーん」

不思議なことに「下のほう」だけをはっきりと示す日本語はないみたい。不自由と言えば不自由である。日常生活で充分に必要な言葉だということに……。こんなときはどうすればよいのか。

「国語審議会に訴えるか」

あれは今、文化庁の国語分科会と呼ばれているはずだが、おそらく新しい用語を創ることは、この会の任務ではあるまい。

仕方ない。自分個々の名前だから、ここでは「自名」とでも呼ぼうか。私はこれを世間に提案したいくらいだ。

再び、それはともかく、日本人の苗字は鈴木、佐藤、田中など、よくあるもののランキンクは一応調べられているが、合計ではざっと(同じ字でも読み方のちがうものを含めると)十萬種くらい。当然、珍しいものもあって、乙骨(オツコツ)、任都栗(ニトクリ)、左沢(アテラザワ)、どれも実際、私の知人にいる。

「『小鳥遊』を知っている？ 苗字だけど」

「えっ。ことりゆう、かな」

「タカナシ、と読むんだ」

鷹がいなければ小鳥はのどかに遊んでいられるだろう。これも私は会ったことがある。ほとんど駄じゃれではないか。

ほかに四月一日(ワタヌキ)は、このころに衣服の綿を抜くから、三斗九升(シトナイ)は四斗ないから、と凄い。

それでも苗字はなんらかの由来を持つものがほとんどだが、自名は、「下のほう」は親たちが勝手につけるから千差万別。

——いいのかな——

心配になることも多い。一生ものなんだからあまり特別なものは当人にとって迷惑となるケースもままあるだろう。とりわけ女の子の自名、タレントや酒場のホステスには、いつか華麗なものかはやり、昨今はさらにそこにもないような珍妙なものがあって、

「こういう親なんだ」

良識を疑いたくならないではない。

過日も「月」と書いて、

「女の子だろ」

「ええ」

「ツキと読むのか」

「ノー。ルナ」

読み方は好き好きとはいえ、おそれってしまった。

あるいはまた、赤ちゃんを抱く母親が、

「アキラってつけたの」

「どんな字を書くの？」

「男の子だけど、私、宝塚が好きだから……月組と星組」

「うん？」

月へんに星を並べて……。『暎』は『なまぐさい』という字だと思っただが……。

